
道

舞奇知

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 道

【Nコード】
N3368J

【作者名】
舞奇知

【あらすじ】
近代化の道を進む烏賊織市。月島グループという大企業によって行われる数々の開発、建設。変わる市民の日常。まだだれもこの町の異常に気付かない・・・

しながらエレベーターホールに向かっていった。

1人残された男は残ったワインを口に含みながら今後起こるであろう事に考えをめぐらせた。

これから起こる殺人、恐喝、事故、密輸、そしてこの町、しいてはこの国の未来を・・・

プロローグ（後書き）

たちばな 文徳
ふみのり

この物語の主人公。

18という若さで月島グループの幹部に就任。

天性の才能を持つが人情にかける

本人が何を思っ
て行動しているのかは本人以外誰も知らない

巻話 春はあけぼの・前

この町は素晴らしい。我が国が誇る近代都市だ。もう誰もこの町は馬鹿にできない。

度重なる開発に建設。町には活気が戻り外国人も見られるようになった。

これも全部月島グループのおかげだ。彼らがいなかったら、この町は大して儲からない漁業や農業で満足し、時代におぼれていただろう。

中には自然がなくなる、昔の思い出の場所が消えて寂しいなどぬかすやつもいるがそんなのじじいやばあの戯れ言だ・・・
そう思っていたのはつい最近までだった。

この町の異常に気付いたのはいつだったか。
おそらくあの時だろう。

あの時俺は・・・

「ただいまあ、ん？お客さんか？」

俺の名前は宮島謙。高校2年生、青春を生きる熱い男、生まれも育ちも烏賊織市で、最近の月島グループによる近代化に賛成している者の1人だ。

家は9番街のA地区。住宅地で町の西北に位置する場所にある。

父さん母さん妹2人で5人家族でみんな仲がいい。

父さんを探していると居間で知らない男と話しているのを見つけた。興味があったから俺は隠れて聞き耳をたてた。

「別にただでという言う訳ではありませんよ。新しいお宅も用意するし、立退料として1億円差し上げます。」

「何度も言う！この家は先祖代々伝わる我らにとつてとても大切な家だ！そんなビルのためにこの家を売り飛ばしてたまるか！」

「このご時世に先祖代々なんて古いですよ？それとビルではなくてタワーです。NFCタワー。四国、いえ日本のシンボルになる予定ですよ？そんなタワーがこの家の跡地にできるのです。ご先祖様もきっと喜ぶでしょう。」

「ふざけたことをぬかすなっ！！失せろっ！！もう2度とこの家の門をくぐるな！！」

「そうですね、残念です。きっと後悔しますよ？」

「父さん、どうしたの？」

男が立ち去ってから父さんに聞いてみた。

途中から盗み聞きをしていたのだが、今かえってきたような風をよそおった。

「ああ謙か。帰ってきたのか。手は洗ったのか？」

「今はそんな事じゃなくて俺の質問に答えてくれよ。」

「どうもこうもない。タワー建設のために立ち退いてくれとほざきやがったのよ。もちろん追い出してやったがな！がははははは。」

「でもこの調子だとこちら一帯の家を買い取るうとしてきそうだな。島さんとか木村さん大丈夫かな？」

「そうだなあ。後で回覧板に付け加えておくか。」

島さん、木村さんはこのA地区に住む他の家の方達だ。

他に武田さん池谷さんたちがいる。宮島家を入れて5家は代々協力して生きてきた。

だが宮島家が他の4家を養っている、と立場は宮島家が一番高い。

次の日、彼ら4家がうちに集まった。

聞くところによるとA地区に住む人全員に同じような人がきて立ち退きを申し出てきたらしい。

何か問題が起きた場合、5家はいつも一番大きい宮島家に集まって対策を立てていた。

俺は会議に参加させてもらえなかったが今回も会議を開いていたようだ。

それから2週間、特に何も変化はなく何事も無かったように時は流れた。

ある夜、俺は居間で妹の香織とテレビを見ていた。

普段俺はニュースなど見ないのだが、烏賊織市中を揺さぶる大事件がおこり、

さすがの俺もニュースを見ずにはいられなかったのだ。

バチバチ キューン！

突然の大きな音ににその場にいた俺と香織は飛び上がった。

「兄さん！今の何？」

「裏庭の方だ！行ってみよう」

町が開発されてから夜でも明るい。

裏庭についた俺たちが見たものは母さんと見る影も無い妹の佐奈。

悪夢が始まった・・・

書話 春はあけぼの・前（後書き）

宮島 謙 みやじま けん

鳥賊織市に住む高校2年生

熱い心と冷静な性格を併せ持つ

家族は父、母そして中学の妹と1歳の妹がいる

式話 春はあけぼの・後

ここは烏賊織病院。今母さんの診察をしているところだ。あの後すぐに救急車を呼び血、まみれの2人を病院に運んでもらった。

勿論警察も呼んだ。「5分後には到着する」と言われたので、家の鍵はあけておき、先に病院に行く事にした。母さんは幸い火傷だけですんだが佐奈は助からなかった。

「軽いストレス障害を起こしていますね。お子さんの最期を見てしまい精神的にまいいってしまったのでしよう。」

「どうしたらいいでしょうか？」

「入院してもらい治療します。何ヶ月かすれば状態に変化が見られるでしょう。」

「そうですか。ありがとうございます。」

「お子さんの方はどうするおつもりですか？」

「早いうちに葬式をしようと考えています。」

「それがいいでしょう・・・。」

それにしても原因はなんだ？

音や傷口から見て爆発物の可能性が高いだろう。

あの場に爆発物など無かったはずだ。

ということはやはり部外者の犯行か。

警察に早く犯人をつきとめてもらおう。

「ん？」

いない。家の前についたのだがいるはずの警察がないのだ。それだけではない。

家の窓が割られている。

部屋が荒らされている。

家の中がグチャグチャにされている。

島さん達の家にも行ってみたが誰もいない。

だが島さん達の家は荒らされていない。

どういうことだ？

何がおきている？

訳が分からない。

俺達の悪夢は続いてゆく……

夏は夜

死んだ。

いや殺された。

つい先日まであんなに元気だったのに。

「いつもいつも漫画とテレビばかり、勉強しなさい」とか

「早くおきなさい、遅刻するわよ」

などというとりとめの無い言葉。

ダメ、思い出すだけで涙があふれてくる。

あの日もいつものように花梨を見送りいつものように帰りを待った。もういくら待っても帰ってこない事も知らずに。

交通事故でいなくなってしまうなんて・・・

二度とあの声を聞けないなんて。

許さない。

花梨を轢いた奴。

絶対許さない。

「清子さん、元気出してください。」

隣にいる美樹が私に語りかけてくる。

この状況で元気になれとは、他にかける言葉は無いのだろうか？

もう葬儀も終わり後は火葬のみ。

もう花もそえた。

綺麗な百合の花を。

「あのですね清子さん、私ちょっと気付いた事があるんです。」

何を今更。

「あの、聞いてます?」

あー、もううるさい

「この葬儀、ちょっと変なんです。」

「何がよ?」

「あつ聞いてたんですか。えーとですね、まずあの棺です。普通、全員が花を棺にそえてから蓋を閉める物なんですよ。

なのに花梨が入っているあの棺は花を添える前から蓋が閉まっていた。ました。」

「それは交通事故で顔が見る影も無くなってしまったからでしょ?」

「そうでしょうかね。私には棺の中身を見せないようにしているように感じます。」

常に棺の周りには男が張り付いてますし。」

「何でそんな事気にするのよ?男なんてどこにもいないじゃない。」

「だいたいあの棺の中身を見せたくないって花梨と何の関係があるのよ。」

「ここから見て右の奥から2番目にある一番棺に近い柱に寄りかかっているスーツを着た男と、」

そこの対称の場所にいるこれまた黒いスーツを着ている男です。」

たしかにじつと見ている気がしないでもない。

「ただ見ているだけではないの?」

「そういうなら試しにもう一度棺に近づいてみたらどうですか? あいつらも何らかの反応をするはずですよ。」

「そこまで言うならやってみるけど。」

「でもくれぐれもあいつらに話しかけたりしてはいけませんよ? 他にも仲間がいるかもしれないし、危険ですよ。」

「ええ。」

私は席を立ち棺に近づいてゆく。

なぜ美樹みたいなまだ学生の女の子の言う事を聞くのか。

それはあの子は特別だからだ。

小さな事にも気が回るし今までも色々な相談に乗ってくれて、

うまくいかなかったためしがない。

だから今回も彼女を信じてみることにしたのだ。

棺に近づく。

手が触れられるほどまで来た。

「へっ？」

先ほど美樹が言っていた左にいる方の男がこちらへ歩いてくる。

美樹の言っていた事は本当だったの？

「どうしました？お母さん。」

「いえ。ただもう一度花梨の顔を見たいなと思ひまして……。」

「そうですか。しかしもう蓋を閉め、釘も打たれています。

顔を見る事はできませんよ。」

このどこか突き放すような言い方に私の小さな疑心は

大きく膨れ上がった。

美樹にはすぐに戻れ、みたいな事を言われたがちょっとくらい大丈夫だろう。

大半が外で火葬を待っているがまだ周りに人も少しいる。

「釘をあける事はできませんか？」

「いえ私におっしゃられても。」

「どうしました？」

別の男が駆け寄ってきた。
右の柱にいた男ではない。

確かこの葬儀を準備、指揮してくださった木村さんだ。

「あとう、もう一度娘の顔を見せていただけないでしょうか？」

「えっ今からですか？もうくぎを打ってしまいましたし……。
難しいですね。」

「お手間をおかけするのは承知の上です。お願いします。」

「しかしですね……。」

「なにが難しいのよ。」

ただ釘を抜いてもう一度釘を閉めるだけじゃない。

それとも顔を見せられない理由でもあるの？」

いつしか私の疑心は確信に変わっていた。

相手の言葉を遮って怒鳴り散らす。

「分かりました。こちらとしても疑われるのは心外です。

ここではあける事ができないので移動しますね。

あとう、一度棺を戻しますので手を貸していただいてもよろしいですか？」

この声に駆けつけてきた男何人かと共に私は奥の部屋に入っていた。
た。

私は胸を高鳴らせながら後に続く。

先ほど右の柱にいた男も棺を運んでいる事にも気付かずに……

夏は夜（後書き）

栗橋美樹 くりはしみき

本作では橘と共に主人公的立ち居ち。

才能豊かで基本なんでもできる。

烏賊織市一の大学に主席で合格するほどの秀才。

烏賊織市で起こる事件に疑問を持ち、独自に調査している。

参話 秋は夕暮れ・前

「ちょっと、ちゃんと聞いてるんですか？」

「ああ、聞いてるよ。」

「でどうなんですか？」

「え何が？」

「あーもういい加減にしてください！」

「まあまあ冗談だよ。」

「そうですね、でどうなんですか？」

「聞く限りじゃ、その女性は葬式場にいた怪しい男と奥の部屋に入り、

その後行方不明となった。だったら、そいつらが誘拐あるいはそれに準じる何かをした。

と考えるのが普通じゃないか？」

「んーそうなんですけど、だとしたら私は何をすれば良いのかわからなくて。」

秀才の橘君に意見を伺っている訳です。」

「警察に行くとかは？」

「どうなんでしょうか。正直迷っているんです。」

「何で？」

「どうも烏賊織市の警察には正常に機能していないという印象をうけます。」

「へー何で？」

「例えば今、北西にある区画でタワーの建設が行われていますよね？そこは元々住宅地だったんですよ。それもただの住宅地ではなく、過去400年以上も続く家系が暮らしていました。

なのに今はタワーが建設されている。」

「ただ単に引越したただけだったじゃない？」

「あの区画には5つの家系の人達が住んでいました。」

調べてみたら、5つの家がほぼ同時に家を空けています。

そんなことあり得ますか？」

「確かにそれは不自然だね。

でもそれと警察にどんな関係があるの？」

「ほぼ同時と言いました。ある1つの家だけ他の4つの家と比べて遅れて家を空けているんです。

しかもその家は何者かに襲撃を受けていたという噂もあります。

「あくまで噂だろ？」

「そうですね、普通そんな噂が会ったら建設延期などの処置をされるはずですよ。

なのにあんなにすんなりと建設は開始されてしまいました。」

「それはおかしい。」

「それだけじゃありません。鮫島グループ、有名ですよね。

この烏賊織市の裏の世界を牛耳っている不良グループです。

いつからあいつらの調査を警察が始めたか知っていますか？」

「10年です。でもメンバーの逮捕どころかリーダー以外、名前さえも分かっていない。

なにかあります。」

「それはただ警察が無能でグループが有能とも考えられる。」

「そのとおりです。警察に裏があっても無くても葬式の件を通報するのは効果がないと思います……。」

この十年で本当にこの町は変わりました。」

「……今までの発言を聞くと、月島グループにあまり良い思いをしていないように感じるけど。」

「そうですね。良い思いどころか嫌悪しています。」

「……」

「この町を発展。よりもグループの発展を重視していると感じます。」

「そうか。なら僕から言える事は何も無いと思う。」

いままでそんな考え方をした事は無かったし。」

しいて言うなら証拠でも集めてみるのが良いと思うよ。

この話に加えて動かぬ証拠があれば警察だって動かざるを得ないだろう」

「そうですか。考えてみます。

「じゃあ電話番号とメールアドレス教えるんで何か気付いた事があったら何でも良いんで教えてください。」

「ああ。」

「じゃ、また来週大学で。」

「ああ、また来週。栗橋さん・・・」

なんなんだあの女。

あそこまで事件、いや事件とさえ認識されていない事柄の真相を突き止めているなんて。

喫茶店を後にしてからの事はあまり覚えていない。

今は自分の書斎であいつとの会話を思い返していた。

栗橋美樹。

俺が先月入学した大学に通っている同級生で、頭の良さでは大学一とされている。

大学では目立たないように心がけていたのだが、栗橋は俺の能力を見抜いてよく何かについての討論を喫茶店でしていた。

俺としては暇つぶしにもなったし嫌いではなかった。

だが今日、あいつは月島グループにを議題に持ってきやがった。しかもあれは今日昨日に考えついた事じゃない。長い時間調べていたはずだ。

初めてだ、この段階で月島グループに疑問を持つ者に出会うのはどうすればいいか。

いや、その答えはある程度俺の中では出来上がっている。俺は携帯電話を手に取り番号を押していく。

あの討論ができなくなるのは残念だが仕方が無い。気付いてはいけない事に気付いてしまい、それに反感を抱くようじゃ救いようが無い。

それにしても宮島達の立ち退きは時間差を作ってやるべきだったな。

「はいあづま鯨島です。」

「仕事だ。ある女を消してほしい。名前は……」

参話 秋は夕暮れ・前（後書き）

鮫島 さめじま 一樹 かずき

烏賊織市を牛耳る不良グループのリーダー。

月島グループの傘下であり、検挙されることはない。

文徳の指令によって月島グループにできない事を
代わりに行う。

肆話 秋は夕暮れ・後

・
・
・

・・・なんか違ったなあ。

・・・いつもと雰囲気違った。

・・・今日の橘君はなんとというか、やる気が無かった気がする。

・・・いつもはすごい勢いで私の意見を潰しにかかってくるのに今

日は、

「へー」とか「そうだね」とか「何で？」とか覇気がない発言ばかりしていた。

・・・なんだろう、興味がなかったのかな？

・・・いやあの人に興味のない事なんてないはず。

・・・どうということなんだろう・・・。

・
・

・
・

・
・

・
・

・・・ん？何あのトラック。

・・・あの大きさのトラックなら速度抑制装置がつけられていて時速90km以上は出せないはず。

・・・でもあのトラックはあの早さで真っすぐに・・・！

私は住宅街をのろのろと歩いていたら足を活性化させ、自分で出せる限りのスピードで走った。

次の曲がり角まで約75メートル。

100メートル24秒の私では、後ろから猛スピードで迫り来るトラックから逃げるのは難しいだろう。

そんな事を考えている間もトラックは迫ってくる。

私もここで終わりか・・・。
だがなぜ急にこんなことに・・・。
これは規則的な日常に反している・・・。
非日常の出来事が起こる理由は非日常的な行動を誰かがとったから・
・・・。
なるほど、そういうことか・・・。

冬はつとめて

くそつ 鮫島の奴っ。

しくじりやがって、何のために絶対に殺せるルートを教えてやっ
と思っっている。

あげくの果て栗橋に通報されて逮捕だあ？

また仕事が増えたな。

だが今の問題は鮫島ではなく栗橋美樹だ。

金を積めば鮫島は大丈夫だろうがこっちはそう簡単にはいかないだ
ろう。

俺に月島グループや鮫島グループへの批判をした直後に襲われたん
だ。

絶対に俺を疑ってくるだろう。

何か手を打たなくては……。

……鮫島一樹。

・・・まさかリーダー直々に私を襲ってくるとは。
・・・あの後私は一か八かで近くにあった電信柱によじ上って隣の家に入り込んだ。

・・・運のいい事にトラックはそのまま突っ込んできて、家の人に警察に連絡してもらって鮫島を逮捕してもらった。

・・・でも良い事はそれだけじゃない。

・・・橘文徳。

・・・あいつが月島グループに関わっている事は間違いない。

・・・でもだからどうする。

・・・あいつが黒幕だったとしてもそんなの証明できないし、私の目的は達成できない。

・・・いや、諦めてたまるものか。

・・・大学であいつの本性を暴きだしてやる。

「おはよう。橘君。」

「おはよう。栗橋さん。」

・・・いつも通りか。

「私ね先週橘君と別れてから大変だったんだよ。」

「何かあったの？」

・・・この素っ気なさもいつも通り。

「あの後、鮫島一樹に襲われたの。」

「えっ、じゃあ昨日ニュースでやっていた鮫島に襲われたけど逆に通報した女子大生って栗橋さんだったの？」

・・・これも今までの橘君なら当然の反応。
・・・ダメだ。

・・・このままいくと、いつもの討論になってしまつ。
・・・揺さぶってみるか。

「でね、私考えている事があるんだ。」

「何？」

「私あの日、橘君に月島グループに批判的なことを言ったでしょ？
その後すぐに鮫島に襲われるって偶然にしてはできすぎでない？」

「そうだね。」

「私の言いたい事は分かるよね？」

・・・さあどうごまかすの？

「ふう〜。」

さすがだね、栗橋さん。

君の考えている通りだ。」

っ！認めた？

「僕が、君が月島グループに良い思いをしていないと月島グループ
に告げたんだけ。」

はっ？

「それがまさか君が襲われる原因になってしまつなんて。
今では反省しているよ。」

・・・違う。

「今回の事で僕も月島グループに疑問が出てきた。どうだい、僕も一緒に君と調査をさせてくれないか？」

・・・違う、でたらめだ。

「ねえ、本当にあなたは通報しただけ？」

「えっ？まさか僕が鮫島に指示をしたとでも？まさか。

ちよつと待つてて。」

・・・そうというと橘君はパソコンを立ち上げて、あるサイトを見せしてくれた。

「これはある会員に入っているとログインする事ができるサイトなんだ。

それでここ、ほら『月島グループに反感を持つ者の名前をこのメールアドレスに送ってください。』

我が社は烏賊織市すべての住民に我が社の事を理解していただきたいと考えております。そこで・・・『ね？僕もあの時は君も感じたと思うけど月島グループには好感を持っていたんだ。それでこのメールアドレスに『日本大学1年生の女学生』と書いて送ってしまった。』

・・・確かに橘君のメールの送信ボックスにはそのメールがあった日付、時刻も一致する。

・・・本当に私の思い違い？

・・・狙う場所やタイミングも彼ほどの頭脳が無くては考えつかないと思っていた。

・・・事実、鮫島が運転をミスらなければ事件はうやむやになって

いただろう。

・・・信じて良いのだろうか？

・・・彼がいれば調査もはかどりそうだし・・・。

昨日のうちにサイトの建設、メールのハッキング。

すべての準備は整えた。

通報した事については誠心誠意謝ったように見えたはずだ。

疑う余地はない。

さあどうする栗橋美樹。

エピソード

「ねえやっぱり難しいよ月島グループのデータをハッキングするの。」

今、私と橘君は彼の家で月島グループの内情を暴くための作業をしていた。

私が襲われてから1ヶ月。

初めの3日間はまた襲われるかもと大学も休んで、ビクビクと暮らしていたが、

いつしかそんな恐怖は薄らいでいった。

この1ヶ月、烏賊織市は大きく動いた。

中でも鮫島一樹が証拠不十分で釈放になった時は発狂しそうになった。

今までこの町で好き放題やっていた不良達の総大将だぞと言っても、同姓同名というだけで決めつけるのはよくない。

とほざいていた。

・・・狂ってる。

もう一つのニュースが無ければこっちも本当に狂うところだった。

来月、皇太子様が烏賊織市を視察しに来るそうなのだ。

そこで私達は月島グループの悪事を上奏しようとした。

月島グループの内情が烏賊織市でなく東京で裁かれればもみ消す事もできないと考えたからだ。

だがいくらがんばっても尻尾をつかめない。

すると向かいに座っている橘君が檄を飛ばしてきた。

「ねばろう。来月まで時間はある。」

「そうね。いつか尻尾をつかめるはずよ。」

だが相変わらず私のハッキングは阻止されている。
まるで私の手の内を読んでいるかのよう……

エピローグ（後書き）

ありがとうございました。

初めての投稿でしたので、色々と戸惑いました。

一応これで完結ですが、反響があれば続きを載せようと思います。

最後に、このような小説を読んでいただいたお方、

お気に入り登録をしていただいたお方、

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3368j/>

道

2011年1月26日18時32分発行